

新春
座談会

都市基盤大改造に期待される 推進工法(3)

設計コンサルタント編



株日水コン

中日本建設コンサルタント株

(公社)日本推進技術協会
専務理事

株東京設計事務所

日本工営株

金海秀紀

前田哲優

石川和秀

荒木隆夫

飯田和輝

昨年9月に開催されたIOC総会で、2020年夏季オリンピック開催地が東京に決定された。東京での開催は、1964(昭和39)年に次ぎ2回目となる。メイン会場となる千駄ヶ谷の国立競技場では大改築が予定され、東京湾臨海部には各種競技場や選手村の建設が計画されている。これにより、大東京の景観は次世代に向け大変身するに違いない。

一方、これらの都市機能を支える地下基盤施設はどうか。例えば、東京区部の下水道整備は概成しているが、そ

の多くが先のオリンピック開催に向け組んだ「大突貫工事」で築造されたもので、供用以降、優に50年は経過し、幹線道路に埋設された下水道管路の老朽化が懸念されている。さらには、近年、いわゆる「ゲリラ豪雨」の頻発による都心部での浸水被害の懸念も抱える。これらへの緊急かつ的確な対応が、即、2020年オリンピック・パラリンピック開催での世界都市東京への評価に繋がる。

これは、下水道に限らず、水道など

全ての地下インフラについても同様だ。さらには、地下鉄新線建設や首都高速の地下化など都市機能向上に向けた話題も上っている。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を契機に、東京はもちろんのこと、他の都市においてもそれぞれ個性を活かし、安全、景観、機能向上を目指した中期的な整備ビジョンを立案中と思われる。これらの展望をどう観るか、30代半ばの設計コンサルタント若手技術者に熱く語って頂きます。彼らこそ、2020年時点では、都市基盤設計界における有力プランナーとして活躍が期待される。

その際、我が国推進業界が培った世界最高水準の推進技術の活用が、斬新な設計プランの裏打ち技術と思えるが、その展望とプランナーから見た技術要求についても合わせて伺う。

出席者(敬称略)

金海 秀紀：(株)日水コン下水道事業部名古屋下水道部技術第一課課長

荒木 隆夫：(株)東京設計事務所東京支社下水道グループ下水道第4チーム

飯田 和輝：日本工営(株)流域・防災事業部上下水道部次長

前田 哲優：中日本建設コンサルタント(株)水工技術本部第3部第1課主任

[進行役] 石川 和秀：(公社)日本推進技術協会専務理事(本誌編集委員長)

次世代都市大改造に必要なものは？

いしかわ かすひで
石川 和秀
(公社)日本推進技術協会
専務理事



石川：皆さん、明けましておめでとうございます。2020年7月、東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定されています。それまでの準備期間は、わずか6年半です。年が開け、今年2014年は、それらに関連する種々整備事業の実質初年度となります。その際、前回の東京オリンピック開催時に建設された千駄ヶ谷の国立競技場や代々木体育館施設などの大改築や、臨海部での新たな競技施設や選手村の建設も進められます。都市プランナーとしては躍動感を実感することでしょう。

皆さんは、専ら下水道計画など水関連の設計業務を担当されているとお聞きしていますが、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、その期待感とか、自らの業務との関連性など、自己紹介も含めてお聞かせ下さい。

金海：(株)日水コンの金海秀紀です。さて、石川さんより冒頭、お話のありましたとおり、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定しました。オリンピック・パラリンピックでは世界中の方々が日本にいらっしゃいますので、東京という成熟都市、また日本の文化が世界から注目される絶好のチャンスであると受け止めています。この絶好のチャンスに向けて我々は、世界の方々が欲しいもの、欲しい感覚を、都市という大きなフィールドを使ってアピールできればと思っています。そのためには、世界の方々が期待

するコトを事前調査するのも良いと思います。

私は入社当初、北海道支所に勤務して、その後、現在の名古屋支所で勤務しておりますが、今日のメインテーマである東京には、実は一度も生活したことがないので生活実感が無いのですが、地方都市と比べると、我々若手技術者にとっては、あり余るほどの挑戦できる技術的なステージが用意されているんだと思います。地下の空間一つとってもそう思います。私の現在の主な業務としては下水道の調査から計画・実施設計などの業務をこなす一方で、社内活動では、未来の上下水道のあり方などを中堅・若手社員で議論していますが、機会があれば、若いうちに一度東京という大都市でいろんな意味で挑戦してみたいと思います。

荒木：(株)東京設計事務所の荒木隆夫です。入社7年目ですが管きょに関する仕事は2年前から携わっています。まだまだ管きょや推進工法について勉強中の身ですので、今回の座談会を通して技術者としてレベルアップできればと思います。

東京オリンピック・パラリンピック開催が決まってから、身内で話題になったのは東京湾の水質ですね。今回トリアスロンの会場がお台場と聞きましたが、下水でお台場といえばオイルボール問題に始まる合流改善事業ではないでしょうか。東京都では現在合流改善

に取り組んでいる最中ですが、目標年はオリンピック・パラリンピック開催の5年後、の2025（平成36）年ですね。泳いでいる選手とオイルボールが、全世界にテレビ中継されないようにするためにも、合流改善は前倒しで進められるのではないのでしょうか。

飯田：日本工営(株)の飯田和輝です。10数年前の入社当初の仕事は、新規の下水道整備ではなく東京都区部の管きょの再構築計画でありました。その当時、既整備地区の機能的な陳腐化や構造的に老朽化した管きょをどのように再構築していくかを、発注者並びに先輩諸氏と議論しながら検討を進め、種々の創意工夫を凝らしたことを今でも思い出します。1964年の東京オリンピックは成長著しい都市東京のアピールでありましたが、2020年は再構築された成熟東京での開催であり、下水道による「おもてなし」も重要でありコンサルタントとして何が提案できるかととてもわくわくしています。例えば再構築された管きょによる道路の安全確保や下水臭の防止から競技者や観客の快適な環境の提供、下水道光ファイバーの敷設による利便性の高い通信設備の提供、また、首都直下地震発生の危険性が高まる中、オリンピック・パラリンピック開催時といえども地震、台風の襲来等が無いとは言えず、管きょや処理場の耐震対策や雨水整備水準の向上によって、安全に安心して競技に専念できる等、種々の